

テーマ

ラオス山村での変化をとらえる

適用分野

発展途上国農村の暮らしについての理解  
農村開発についての理解  
ラオスについての理解

研究名称

ラオス焼畑村落の変動

氏名所属

中辻 享 教授  
文学部 歴史文化学科

内容

### ●特徴

ラオスの山地に住む人びとの暮らしの変化を研究している。山がちなラオスにおいては山地の森林を伐採・焼却し、自給向けの米を生産する焼畑を営み、暮らす人びとが現在も数多い。焼畑は森林破壊の元凶とよくいわれるが、ラオスのような人口密度の低いところではむしろ、山地の環境にうまく適応した農業とすることができる。しかし、他の発展途上国農村と同じく、彼らの暮らしにも1990年代から激しい変化が起こりつつある。経済のグローバル化が進む中で、日本など海外に輸出するための作物を栽培するようになってきている。彼らにとっても現金収入が重要となり、それを目的とした多様な生業を営むようになったのである。また、これまで以上にラオス国家のさまざまな政策の影響を受けるようになった。彼らの生計基盤である焼畑を禁止する政策や農村開発政策などがそれである。こういった中で、彼ら焼畑民がどのように自らの生活を切り開こうとしているのかということに関心を持っている。

### ●研究内容

2002年からラオス北部のルアンパバーン県シェン

ヌン郡のカン川流域の村落に通っており、ラオスでの滞在期間も3年近くになっている。これまでは、焼畑抑制策である土地・林野配分事業や農村開発政策である集落移転事業などの政策が住民の生計や土地利用に与えた影響を実態調査により明らかにしてきた。こうした政策は都市に住む役人が自らの開発理念を押し付けるようなものとなっており、焼畑民の生計やニーズの実態を十分に踏まえたものとなっていない。そのために、彼らの生活を向上させるどころか、かえって悪化させている例が多い。農村部でのマイクロレベルでの実態調査をもとに、新たな農村開発政策のあり方を考えていくことが重要である。

現在は焼畑民の家畜飼育に特に関心を抱いている。彼らはもともと焼畑を行なうだけでなく、水牛、ウシ、ブタ、ニワトリなどの家畜も飼育してきた。水牛、ウシは焼畑の休閑林などに林間放牧し、ブタやニワトリは集落内で飼う。ラオスでも肉類の需要が高まっており、家畜は安定的な現金収入源である。そのため、彼らの家畜飼育の実態を分析し、その発展策を検討することで、焼畑民の貧困問題解決に貢献することができると思う。

キーワード

焼畑、家畜飼育、土地利用、地理学、ポリティカル・エコロジー、ラオス、東南アジア

連携方法

■ 講演 ■ 研修 ■ 研究相談 ■ 学術調査 ■ コメント ■ 共同研究